

ムーンメモリア・ロストノイズ
二話…『ブランカ』

雨和七瀬

「名前まで覚えてないのかあ、困ったな。いつまでも『金髪ちゃん』じゃ良くないし、なんか名前つけても良いか？」
ユノは携行食のクッキーを頼張る少女を楽しそうに眺めながら、少女に尋ねる。

「はい、ぜひぜひ。呼びやすい名前前で呼んでください」
少女はもう一つクッキーをつまみ、口に放り込む。数日木の実だけで食いつないでいたという少女は、二人が日々の野外調査で飽きるほど食べているクッキーを、まるで至上の食べ物のおいしそうに、口角を上げながら食べていた。

ルークはその様子を見てると調査記録を書く手が緩んでしまっていることに気付き、視線を手帳に落とす。手元を見ないで書いていたものだから、いつもよりも字が崩れていた。

「名前を付けると情が移るからやめろ。あくまで研究対象なんだ。『二号』とかそんな感じで……」

「おういルーク、流石に薄情すぎるし、今更なんだよ！クッキー全部金髪ちゃんにあげちゃってさあ」

痛い所を突かれ、ルークは視線を更に逸らす。

「それに、呼びやすくないし！ とはいえ、どうすつかな……」

ユノはポリポリと頭を搔く。

「よし、こういう時は観察すると良いって相場が決まってるんだ！」

ユノは少女の前に立ったり、後ろに回ったり、全身をこれでもかという程にくまなく眺める。そして何周かし終わった後、ユノはにかつと笑った。

「やっぱ小さいな！」

ルークは予想通りの雑な感想に眉間を押さえる。

「で、手入れがされた金色の髪、もちもちの肌、ふっかふかの服……」

（お、さすがにあれでは済まさないか）

「……ルーク」

「俺に振るな、お前が考える」

ルークはこれ以上話しかけられないよう、少し離れた場所の調査に向かった。

ルークは二人が見えなくなった所で、やっと一息つく。

「ユノ、俺がああいうの苦手なのを忘れてるんじゃないか？」

ルークは張りつめていた気持ちちがほぐれ、木にもたれかかったかと思えば、そのままずると木の根元に座り込む。

「でも慣れないと研究が進まない……ああ」

ルークは手で顔を覆う。先刻、ユノの口車に乗せられてしまったことを早速後悔し始めていた。

「陛下が研究材料として認めなければ、解放されるんだ。一刻の我慢……我慢……」

ルークは何度か呟き、気持ちを整理し終えると立ち上がり、少し記録を書いて、二人の元へ戻った。

「名前決まったか……ユノ？」

戻ってみれば、ユノは鼻水を垂らしながらおいおいと泣いていた。少女はそんなユノをオロオロしながら慰めたり、どうしたものかと悩んだりを繰り返していた。少女はルークが帰ってきたのを見て、助けを求めてきた。

「何か名前の手がかりになる記憶が無いかと思いついて出したんですけど、本当に何も思いつけないと伝えたら、こうなっちゃって……」

「うえ、だってよお、故郷も家族も、好きなものも思いつけないって言われたら、悲しいじゃないかあ」

ユノはユノで、嗚咽交じりに言葉を捻り出す。それを見かねたルークはハンカチを取り出し、ユノに差し出す。

「一回落ち着け、記憶喪失はそういうものだろう」

ユノはハンカチを受け取ると、顔全体を拭いた。

「……」

ルークはユノが鼻まで拭う予想はしていたが、いざ目の前にすると硬直してしまった。

「ゆ、ユノさん、鼻、鼻！ 私ちり紙とか持ってたんじゃないかな……」

少女も慌てて服のポケットなどを探し、スカートのポケットから紙を取り出した。

「よし、なんも書いてない……ちよつと硬いですけど使ってください」

少女がユノに紙を渡す代わりにルークのハンカチを手にとると、「水で流してきますね！」と告げ、池のある方へと走っていった。

「……金髪ちゃん、いい子だな」

ユノは鼻を真つ赤にしながら、少女の駆けて行った方を見る。答える前に、ルークは大きなため息を一つ吐いた。

「はあ……。否定はしないが、どちらかと言えばユノが……おおらか過ぎるだけだ」

無神経、とは言わない。言えばどうなるか、ルークは深く理解していた。

少し待っていると、少女が濡れたハンカチを持って帰ってきた。

「お待たせしました、絞ると布が傷むかと思って、乾かさずに持ってきたんですけど、どうします？」

少女は白いハンカチを広げて差し出す。泥などが付かないように丁寧に洗ったのがうかがえる。

「すまないな。後は自分で乾かす」

ルークはハンカチを受け取り、一度大きく振る。パン、と小気味良い音が鳴ると同時に、魔術で生まれた暖かい風がハンカチを揉み、水気を飛ばしていく。

「わあ……」

少女はその様を、目を輝かせて見つめていた。

「魔法、興味あんの？」

ユノが少女に優しく声をかけると、少女は何度も首を縦に振って肯定した。

「魔法、すごい便利そうで」

「あ、そういう感じ？ オレてっきり『かっこいい』とかだと思っただわ」

「まあ、見ているのが魔法でハンカチを乾かす様子だとその反応も頷けるな」

ルークはハンカチが乾いたのを確認し、角を合わせながら畳んでいく。

「まあ、魔法に限らず、時間があれば色々学ぶと良い。魔法が使えるようになるかは分からないが、知識は持ち手の味方だ」

ルークはハンカチをしまい、ユノに問いかける。

「ユノ、名前、もう決めたか？」

「うーん、さっきの話からイメージは掴めた。なんか、『可能性は無限大！』みたいな名前はどうかなくて」

ユノは大きく手を広げ、わさわさと動かす。

「無限大、ですか」

少女も服をカサカサとさせながら動きを真似する。

「そう、これからちよつとルークの仕事を手伝ってもらった後は、魔法を勉強したり、その武器と身のこなしで冒険者として大活躍したり、何でもできそうじゃん」

ユノはまるで自分のことのように楽しそうに話す。「そうとも限らない」という言葉がルークの喉まで上っていたが、唾と一緒に飲み込んだ。その代わりに大きく息を吸い、ほんの少し早くなった拍動を誤魔化す。

「なら、一つ案がある。『ブランカ』というのはどうだ。

『まっさらな』という意味の古代語が由来の名前だ」

ルークの提案に二人は目を瞑る。ユノは名前を呼ぶ場面を、少女は呼ばれる場面を想像しているようで、二人とも段々と笑みを浮かべる。

「……」

ユノは目を開け、キラキラとした顔を見せた。しかし感想をすぐ言わないのは、少女のことを待っているのだろう、とルークはすぐに気づいた。

『ブランカ』……私の名前……素敵な意味まで考えてもらえて嬉しいです」

少女が頬を赤く染めて、にこりと笑う。それを見たユノは少女を抱き寄せ、少女の頭を撫でる。

「オレも良いなって思ったんだあ！ 気に入ってくれたなら決まりだ、今日からオレ達三人にとって、アンタは『ブランカ』だ！」

少女は整えられた髪型をくしゃくしゃにされても気にせず笑っていた。

ルークは『ブランカ』のこの先を想う。名前を与えてしまった以上、もう放つてしまうわけにはいかなくなった、そんな気持ちで勝手に想像力を働かせてしまうのだった。そしてもう一つ、別のものを思い出すに至った。(十年前と同じことをしているな……『あいつ』は元気にしているだろうか)

木々に隠れていた月明かりが、彼の眼前にほんの一瞬差す。それと同時に、ユノが背をバン、と叩く。

「なあにぼーっとしてんだよ、ブランカの名付け親だろ？ 呼んでやりなよ」

分厚い外套越しでありながら皮膚をひりつかせるには十分な威力の平手打ちを喰らったようなものだった。ルークはほんの少しよろめいたが、すぐに持ち直して少女の前に立つ。

「いつまで共に居られるかは分からないが、研究への協力、感謝する。……これからよろしく頼む、ブランカ」ルークは手を差し出す。そのときに手袋を外すのを忘れていたことに気付いたが、手を引き戻す前にブランカはその手を握った。

「はい、こちらこそよろしくお願ひします、ルークさん」

まっすぐにルークを見る目に、ルークは彼女が魔法を知らないこと以前に、自分の顔を見ても、名前を聞いても何も知らないということを感じ出す。

「……そろそろ離しても良いか」

「あ、ごめんなさい」

ブランカはそつと手を離す。もしかしたら、ブランカとは上手く交流できるかもしれない、とルークは少し、ほんの少しだけ体の強張りが解けるのだった。

〈三話へ続く〉